

ぐろっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十二年三月一日発行（毎月一回一日発行）
第十六卷第十一号（通巻第一九一号）

鈴



誓子

山口誓子先生追悼号

第191号

3. 2010

俳句雑誌

GLOCKE

市松雛

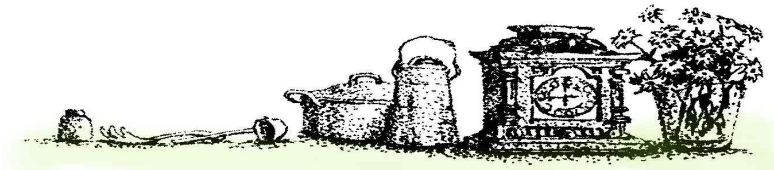
品川 鈴子

市^{いち}松^ま雛 抱^{おな}け ば 吾^{おな}も 同^{おな}い 年

内裏雛 倣^{おな}ひて 坐^{おな}る 異人客

雛の髪撫^{おな}づ 紅毛の指を以て

半世紀ぶりの消息 春立ちて



味噌で独活和へれば足りる喜寿の盃

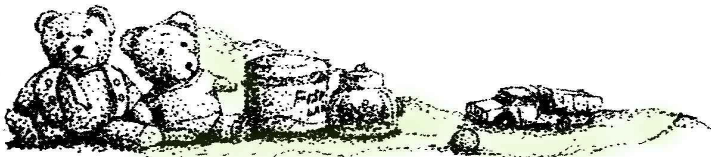
浅草芝居かぶりつき占むマスク婆

花の冷え急階軋む芝居小屋

浅草の初花くぐり掛小屋へ

大入りの浅草芝居花綻ぶ

鳥肌の女形流し目春隣り



第十四回ぐるっけ賞発表

受賞二名

俳句の部

「抹香鯨」

「兵隊の墓」

静 寿美子

伊勢ただし

大豆炊く匂ひ湯浅の春浅し	脈を取る老漢方医温かし
冴返る格子通りに醬の香	スカートを押へ縄跳び桜草
薫風や手向け百韻ろうろうと	帰省子に旧き円卓並べたる
連子窓続く遊里の立葵	ひさびさに子と諍へり熱帯夜
杖よりも妻を頼みのコスモス園	新調の踊帯締め阿波の夏
雷神をはじめ返してウルル神	兵隊の墓並ぶ丘小鳥来る
夏怒濤抹香鯨にゅつと現る	父兄居ぬ運動会の早仕舞

玉

鈴

吟

大阪 小林 玲子

金の蕊重たきほどにお茶の花
凧を避ける茶房のドア重し
屋台から味噌焼く匂ひ雪催
首もとに湯ざめの気配字引閉づ
黒猫と出会ふ墓所の落葉坂

香川 近藤 倫子

倚りかかるものは脆くて冬薔薇
悴みて音揺れてをり鼓笛隊
風邪の子の元の息子に戻りけり
紙懷 炬子への荷物の片隅に
白息に溶けて本音の溢れ出づ

兵庫 坂口三保子

目印の赤布巻ける竹を伐る
高台の家より冬の流れ星
霧流る離宮の古向き山荘に
納め天神白梅一輪開きゐて
ぼろ市の古き鏡に吾うつる

兵庫 佐方 敏明

村人が葉牡丹競ふ直売所
餡餅の試作続けて三個食ぶ
うどん鍋大腸検査終へし夕
冬木の芽怪我で早去る盜墨王
木枯しに釣りの二人の糸絡む

東京 佐田 昭子

「切絵図」で江戸を辿りし十二月
丸窓の宇宙なりクリスマス
ボイジャーに積みたい匂あり年の暮
生き方を仕分けせねばと初日の出
初旅の高千穂夜神楽奉納譚

兵庫 塩出 眞一

復元の帆船据ゑて波止小春
句碑除幕せり木枯の峰寺に
冬銀河いとこの集ひ無事終へて
啄めり鴨ら河原の日溜りに
裸婦像凍つ地震の刻指す時計抱き

大阪 島 純子

顔見世は亡夫の贈りで続く幸
顔見世は憂さを吸いこみ我もゆく
顔見世の花道六方肩にのり
顔見世の黒衣屯す楽屋口
顔見世の昂ぶりのせて高速道

香川 島内 美佳

祇王寺の窓より眺む散紅葉
作務衣にてお抹茶運ぶ紅葉寺
茅葺きの落柿舎に添ふ柿二本
魯山人展梅擬壺に生け
さりげなく義母を連れ出す小六月

大阪 島本 知子

校外学習全員マスクつけており
冬籠シヨコラの中毒にもなりぬ
着ぶくれて擦り抜けにくき降車かな
一晚でほぼ裸木になっており
胸張って歩くペンギン寒の昼

愛媛 鈴木てるみ

数え日に犬も籠さげおつかいす
一斉に護身のかまえ寒稽古
病棟で舟を案ずる鯛おこし
病室の点滴凍てし骨の怪我
風花の舞いて進路の決められず

大阪 鈴木 浩子

枝ばつさり決闘の松手入れ中
猫がさつと出づる時雨の芭蕉庵
引越しを気遣ふ老母十三夜
枯蠶螂にはまだなれず通し土間
白障子雨戸の欲しき芭蕉庵

香川 陶山 泰子

山紅葉堂守に似し菩薩像
園長は武士の心根石路の花
鳩ばかり見ている授業中
骨壺の二つ並びし冬座敷
永眠の地は冬の見える丘

岡山 瀬口ゆみ子

千度も染めを重ねし冬紅葉
時雨れては学府の門扉重からん
山眠り広き裾野の岐路多し
溜息の椅子と名付けて木の葉散る
埋火に対峙し伝へたきことも

兵庫 高橋 大三

寺紅葉三つ散らばる江戸期句碑
草紅葉工事車五時にぴたり止め
円形に落葉並べて子のケーキ
サッカー派野球派もあり広場の児
短日に失せ物続き古希間近

薬草歳時記

(一九〇) アシタバ (明日葉)

大音悦子

明日葉を食ふ筈なりし夫は亡く 品川 鈴子

有吉佐和子の「海暗」という本があります。新聞社に勤める友人が社のくずかごの中から拾って読み面白かったと私に譲ってくれました。アシタバという植物名をはじめて知ったのはこの本です。

次のような文があります。

「アシタバというのは伊豆七島の中だけに生えて本土では見ることのできない食用の野草である。精力の強い草で今日摘めば明日にはもう芽のところでからアシタバというのだと島の人々は皆そう思っている。一年中絶えることがなく夏はアクが強いが冬は苦味が消え緑が冴え葉も茎も柔らかくて絶好の食べごろになる。御蔵島では山にも野にも里の道にも生えていて人々の常食になっている。」

「海暗」とは黒潮のことで、主人公のおよん婆がひ孫の時子を東京から連れ戻し御蔵島の青年と結婚させようとするところから始まります。「東京では何でも簡単に買うことができ、道は平らでいくら歩いても息の切れることがない。女

の仕事に畑仕事や山行きがないから手が泥で汚れるということもなかった。」そんなうつとりするような生活ですが、島に帰ってきた時子が洗剤で指紋の消えていた指に指紋が出てきたことに気付きます。島では米軍射撃場問題など様々な問題に翻弄されますが、人間の本質は変わらず、その象徴として強くてやさしいおよん婆が描かれています。

早速アシタバ茶を買ってきて飲みました。何となく力が湧いてくる気がします。アシタバはせり科の植物です。牧野植物図鑑によると伊豆七島の他に関東や紀伊半島の温暖な海岸地帯に生えることがあります。茎、葉を切ると出る黄色い汁にはイソクエルシトリンが含まれ、利尿、緩下、毛細血管強化作用があり、高血圧予防に用いられます。乾燥葉20〜30g(一日)に熱湯を注いでお茶がわりに飲みます。又生の葉を絞って青汁にします。この場合は一日100mlを限度にします。若葉をゆでておひたしや汁物に、佃煮はみやげ物として売られています。

参考文献 「たべられる山野草」主婦と生活社

「薬草カラー図鑑」主婦の友社

有吉佐和子著「海暗」新潮社

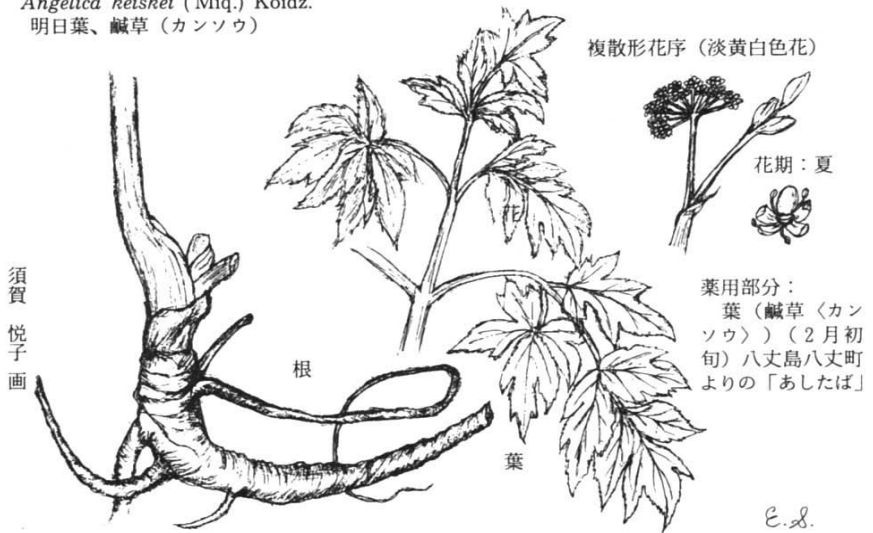
「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

著者略歴 神戸薬科大学卒、薬剤師

アシタバ (ハチジョウソウ) [シシウド属] (セリ科)

Angelica keiskei (Miq.) Koidz.

明日葉、鹹草 (カンソウ)



須賀悦子画

もてなしの明日葉づくし伊豆八丈	補陀洛へ向かひし浜に明日草	父在りし海辺はいづこ明日葉も	明日葉を摘む灯台の足下で	ゼロ金利に慣れ明日葉を摘みてをり	明日葉や村ごとに持つ舟溜	あしたばの花に怒濤の迫りけり	昨夜 ^{よべ} 荒れし海のしづけさあしたば摘む	明日葉の酔漬和へもの島泊り	芹よりも明日葉匂ひ売られけり
* 八木紀子	* 塩出 眞一	* 勝野 薫	荻原 記代	岩田みち子	中町 和子	荻野 泰成	仲村美智子	岡田 日郎	石塚 友二

(* ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

外套のぶんだけ君が遠くなり 香川 横内かよこ

励ますが励まされたり帰り花
病棟に鯛焼配り退院す

隠し事またひとつ増え冬帽子

小春日の光眩しき術後なり 兵庫 明石 文子

雨上りポプラのほひ冬に入る

虎落笛六法全書手放せず

老い二人手抜きは法度と年用意
抜きたての蕪の酔のもの熱下る 兵庫 小松美保子

霜の畝猫が始末の二たところ

窓割れむばかり灯ともすクリスマス

昭和ふりとほす献立日記果つ

誓子句碑除幕を待つ間の空高し 東京 遠藤とも子

落葉道軍艦摩耶の記念碑も

島蔭にまた島出で来秋の瀬戸

芸者衆白衿つらね博多場所

納屋にあり祖父が自慢の銀屏風 兵庫 林 哲夫

腰屏風よくよく見れば時代もの

手袋もめがねも忘れ終電車

気がつけば忘年会は昨日なり

桜落葉拾ひたくなる色ばかり 兵庫 平田恵美子

野菜市魅せられて買ふ蕪の赤

冬ぬくし百段苑を登り詰め

待つ子らの視線集めて鯛焼屋 愛媛 谷川 爽

熱つぼくて歯触り固き冬りんご

あなじ波小舟持ち上げ砕け散る

雪なれば根菜どれも銀杏切り

夕日射す枯野の端に鳥衾 兵庫 本木下清美

大根焚老も若きも並びたる

返り花お手玉四つ舞ひ上がる

押し寄せる子等の声して冬木の芽

似顔絵描き囲んでをりぬ冬ぬくし 兵庫 西田 敏之

予後の身の検査巡りや暮早し

ルミナリエ早々解きてせはしなや

秀 鈴 記

病棟に鯛焼配り退院す

横内かよこ

退院する折は、病棟で共に過ごす間に親しくなつた誰彼と名残を惜しみます。お互いの体調を気遣いながら、帰宅できるうれしさと、まだ病床に残る人への遠慮で複雑な思いますが、気取らずにホカホカの鯛焼きを配ると、誰もが祝福の笑みをこぼす。庶民的な鯛焼きの温かさ、柔らかさ、甘さは年寄りから子どもまで喜ばす。手軽で楽しい縁起もの。顔の広い病友が去るとちよつと淋しい病棟ぐらし。

老い二人手抜きは法度と年用意 明石 文字

年用意には時代が反映される。戦前のしきたりを親に習つたが、戦を境に生活様式や食文化もすつかり変わった。せめて年に一度の迎春は古き佳き伝統を捨て難くて手間隙をかける世代も、今や年寄り夫婦だけ。体力が乏しくなり手抜きをしたいが、易きに流れず、自らを戒めながら和風の年用意とは頼もしい。老夫婦の合言葉で時代懸かつた法度とは禁令のこと。

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 古井 公代 //

*選句は全て 品川鈴子

窓割れむばかり灯ともすクリスマス 小松美保子

クリスマス街角は、どの窓も目一杯に強い燭光の灯で燦燦と眩しい。ガラス越しの室内はクリスマスを祝福して、暖炉の薪もあかあかと燃えて、いかにも暖かそう。仄暗い外は寒風が吹きすさびガラス一枚で距たる内との温度差で、今にもガラスに罅が走りそうだ。でも強化ガラスを信じて豊かなる時代。

島蔭にまた島出で来秋の瀬戸 遠藤とも子

国立公園に指定されている瀬戸内海には、大小約三千の島が点在、島がまさに景観を呈しています。秋、それぞれに島も粧い趣きを増しています。作者は船旅をされているのでしょうか。次々と現れる島に心を奪われたり、島の多さに驚いたりです。その気持を「また島出で来」と表現されました。爽やかな秋の瀬戸の楽しい船旅に弾む気持が伝わります。

気がつけば忘年会は昨日なり 林 哲夫

年末はなにかと用が多くばたばたしている間に日が経ってしまいます。まだ先だと思いついて忘年会が、昨日だったと気付いた作者ははっとしました。お仲間に見えるのを楽しみにしていた日を忘れてしまつて、さぞがっかりされたことでしょう。

冬ぬくし百段苑を登り詰めて

平田恵美子

百段もある苑とは何処でしょうか。作者は少し戸惑われたけれどせっかくだから頑張つて登り、やっと登りつめる事が出来ました。そこからは素晴らしい景色が見渡せ澄んだ冬の日射しがふりそそぎます。やった！うれしい気持が冬ぬくしが語っています。

雪なれば根菜どれも銀杏切り

谷川 爽

一言いたいたい事を物に置き換えて表現するという俳句のお手本のような佳句。主婦である友人五人に①雪の日②根菜③銀杏切りから連想する献立は如何とアンケートしましたら、全員が温かい具たくさんのお汁物：それも豚汁が一番でした。外れていたらごめんなさい。作者の家族への愛情と共に野菜の色、刻む音、美味しい匂いが伝わって来ます。

大根焚老も若きも並びたる

本木下清美

十二月九日、十日の二日間京都鳴滝の了徳寺の行事。親鸞上人に帰依した村人が毎日大根を煮てさし上げたという故事を記念し、庭前に大釜を据えて大根を炊き参詣者にふるまう。本来は中風に利くと参詣したが今は無病息災の御利益が有るとか、バスツアーまで出る賑わい。そこには中風など縁の無さそうな若い人達も気懸かりな老人も並んでいる。大根焚の人数の多さに驚いたりあきれたりする作者。

枯蠓窓のあけしめなすまに

西田 敏之

蠓螂は性の荒い肉食の昆虫で、交尾の後雌は雄を頭から食べてしまう残忍さ。その雌も産卵の後、辺りの草と同じ枯色になり動作も鈍く、窓に貼りついて、窓の開け閉めにもじーとしている。最後は眼玉も枯れて死ぬ。なんとも哀れを誘う姿に生まれた御句。作者の視点が温かい。

父母よりも夫と長く生き冬籠

片山八重子

別にとりたてて会話は無いけれど炬燵のある部屋で、ゆつたりとした刻が流れています。八十三才の作者ですから、五十年いへ六十年近くは御主人と二人三脚の年月です。その事に気付かれて改めて父母のこと、又夫と共に歩んできた苦楽の日々をも懐かしく感慨にひたりました。いつまでも心安らかに仲むつまじくお過ごし下さい。